

ホームページに世界の大学戦略を見る

アメリカのカレッジ・スポーツ戦略

学生アスリートを支援する プログラムを充実

山田礼子 同志社大学教授

宣伝効果が見直され新たな戦略として注目

ハンカチ王子の愛称で高校野球のスーパースターとなった斎藤佑樹投手が、早稲田大学入学とともに野球部に入学して以来、六大学野球の観戦者が急激に増加しているという。お正月恒例のイベントである大学箱根駅伝を楽しみにしている人々も多く、駅伝の活躍によって大学の知名度を上げている大学も決して少なくはない。かくいう筆者も毎年ラグビーの大学選手権を楽しみにしている視聴者の一人である(秘かに新年は国立競技場かと思っていたが、その夢は残念なことに年末前に消えてしまった)。最近では、こうしたスポーツを通じた宣伝効果が再認識され、カレッジ・スポーツが重要な大学の戦略の一つとされているようだ。

ところでカレッジ・スポーツにはどのような意味があるのだろうか。野球、フットボール、ラグビー観戦等に集まる在学生、教員、そしてOBやOGは多い。そうした観戦を通じて、愛校心を確認し帰属意識を醸成するという点から見ると、学生の自校教育の一環として意義があるだけでなく、OBやOGからの大学への支援にもつながる可能性がある。少子・高齢化社会に直面している大学にとって、テレビの放映枠に入るようなスポーツが強い場合には、宣伝効果も高いことから、経営戦略の一つとして評価されるようになってきているともいえるだろう。

今号ではアメリカのカレッジ・スポーツを取り上げ、そ

の歴史や、各大学でどのようなアスリート支援プログラムを提供しているのかを見ていくことにする。

イギリスに比べ大ビジネス化

カレッジ・スポーツはもともと、イギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学の学寮同士の対抗戦から出発しており、イギリスがその発生の地である。イギリスのカレッジ・スポーツは現在でもアマチュアリズムを堅持していることが特徴となっている。

一方、アメリカの大学では、イギリスから学寮対抗のカレッジ・スポーツを導入した創世記においては、東部のアイビー・リーグを中心にカレッジ・スポーツが発展してきた。今でこそ「ビッグ・テン」と呼ばれる名門大学スポーツリーグが存在する中西部や西部の大学が東部の大学を凌駕しているようだが、アイビー・リーグのアメリカン・フットボール最終戦は伝統的にハーバード対イエールを指しており、“The Game”と呼ばれ特別な意味を持っている。いずれにしてもアメリカにおけるカレッジ・スポーツは、大学対抗というだけではなく、地元の住民を巻き込んだ一大スポーツイベントとなっている。人気のあるチームのチケットは入手することが難しく、プレミアもつくぐらいである。

このようにアメリカでカレッジ・スポーツが盛況になった背景には、イギリスのアマチュアリズムとは対極にあるプロフェッショナリズムや商業主義と結びついたこと

が要因にある。ヨーロッパで発生した大学の使命や目標とされる「知識の創造と伝達」は、アメリカという国で高等教育がより大規模に拡大してきた過程においても受け継がれてきている。一方で、カレッジ・スポーツ対抗戦は必ずしも高等教育の使命や目標とは一致しない。にもかかわらず、何故アメリカの名門大学においても初期の頃からカレッジ・スポーツが重要視され、現在にまで引き継がれてきているのだろうか。ヨーロッパの大学であるイギリスの大学が初期のアマチュアリズムを現在でも大事にしているのとは対照的に、アメリカでは一大ビジネスになるまで隆盛しているのはどうしてなのだろうか。

その答えは、イギリスに代表されるヨーロッパの大学が国立という設置形態で設置されたのに対し、アメリカでは個人や教会、州政府が設置母体であったため、カレッジ・スポーツには当初から資金を調達するという位置づけがなされていたことに関連しており、この背景が現在まで続いているというわけだ。

カレッジ・スポーツを健全に制度化した NCAA

アメリカでは大学のスポーツチームで構成されているリーグのことをカンファレンスという。そのカンファレンスを統括する組織が全米大学体育教会(National Collegiate Athletic Association, NCAA)である。大方のカンファレンスはこのNCAAに所属している。NCAAに所属している各カンファレンスは構成している大学の規模や各スポーツチームの強さによって、さらにディヴィジョン1(一部)、2(二部)、3(三部)に分かれているが、一部に属している場合、その種目の人気があれば全米でテレビ放送され、地元だけでなく他の州からも選手が集まってくることになる。このようにスポーツは宣伝の媒体となる一方で、強いコーチの雇用や、選手獲得に係る費用、あるいは選手のための様々な支援や設備の充実など、経費もかさんでくるという側面もある。

それではアメリカのカレッジ・スポーツの統括組織であるNCAAはどのような背景で設立されたのだろうか。

アメリカのカレッジ・スポーツは、創世記にフットボールから始まったといわれているが、20世紀始めの頃のフットボールの試合や競技は、現在のようにルールが厳密



<http://www.ncaa.org/wps/portal/!ut/p/kcxml/>

に適用されているというわけではなく、負傷や死亡事故も起きていた。1905年に当時のルーズベルト大統領が、カレッジ・スポーツ関係者に対して、大学スポーツ改革を要請したことを受け、1906年にIAAUS(Intercollegiate Athletic Association of the United States)が発足し、1910年にNCAAへ名称を変更した。設立当初は競技ルールの策定などが主な活動であったが、1921年、陸上競技の大会を主催したことを契機に、その後多くのスポーツ大会を主催者として開催するようになる。1952年にはミズーリ州カンザスシティにNCAAの本部が設置され、その後NCAA主催の試合はテレビ放映がされるようになった。このことが大きな収入の原因となる。また、中西部にNCAAの本部が置かれたことが、東部の大学から始まったカレッジ・スポーツがその後中西部地区において活況となる要因にもなった。

加盟大学やスポーツチームが増加するにつれて、カンファレンスが細分化するようになり、1973年にはカンファレンスの元に3部から成るディヴィジョンが設置された。NCAA公認のスポーツ奨学金もあり、ディヴィジョン1と2のカンファレンスに属する大学の有望選手に付与するこ

とができる。1982年までには女子リーグの運営も始動し、現在NCAAは23の競技で88もの大会を運営あるいは主催している。1200以上もの大学から4万人の学生が大会に参加していることから、その規模がいかに巨大であるかがわかる。

NCAAは現在、競技の規則の策定や管理、大会運営、テレビ放映権についての交渉、スポーツ選手のための教育プログラムの提供や研究等、様々な活動を行っている。単なる個別大学の活動でしかなかったカレッジ・スポーツを、健全な秩序あるものにするようガイドラインを示し、制度化したのはNCAAであるといえるだろう。

NCAAの年間収入の95%近くが、テレビ放映料やチャンピオンシップからもたらされる収入である。例えば、2006-7年の収入は5億6400万ドルであったが、そのうち95%はテレビ放映料からもたらされている。こうして得た収入を大会の運営サービスや専任の職員の給与として還元している。

http://www.ncaa.org/wps/portal!/ut/p/kcxml/4_Sj9SPykssy0xPLMnMz0vM0Y_QjzKLN4g38nYBSYGyXqb6kWhCjggRX4_83FSgeKQ5UMA0NFQ_Kic1PTG5Uj9Y31s_QL8gNzSiPN9REQD6aqlp/delta/base64xml/L0IDU0IKTTd1aUNTWS9vQW9RQUFJUWdTQUFZeGpHTVI4U21BISEvNEpGaUNvMERyRTVST2dxTkM3OVIRZyEhLzd

🖱️ 学業などアスリートへの支援も充実

それでは、個別大学はカレッジ・スポーツを学内でどのように位置づけ、運営あるいは学生アスリートに対する支援を行っているのだろうか。各大学のHPを見ていこう。

東部アイビー・リーグの一つであるダートマス大学は、カレッジ・スポーツも大変盛んな大学のひとつである。この大学のHPにはダートマス大学のカレッジ・スポーツ専用のサイトであるBig Green Sportsというリンクが張られている。

<http://www.dartmouthsports.com/>

ダートマス大学のスポーツチームは“The Big Green”と呼ばれ、NCAAのディヴィジョンIとアイビー・リーグ

に属している。The Big Greenには強豪チームも多く、NCAAの決勝戦を戦うチームは、陸上競技、バスケットボール、クロスカントリー、サッカー、スキー、ゴルフ、ラクロスなどがある。大学当局も2000年以来、総額7千万ドルをかけてスポーツチームの支援や設備を整備してきている。大学の方針として、学生アスリートといえども、スポーツだけではなく、学業も怠ることなく社会に輩出することに力点を置いていることから、学生アスリートへの様々な支援も充実させてきた。

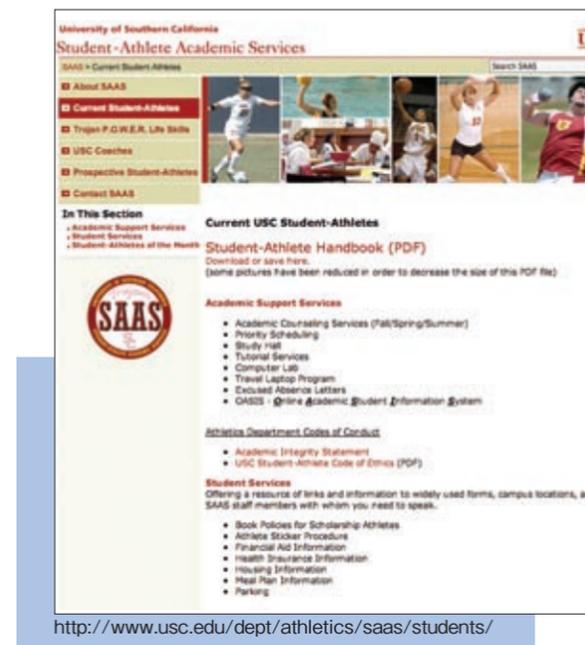
例えば、The CHAMPS/Life Skills programは学生アスリートの学業、スポーツそして社会人としての成長を支援するという大学の方針を反映したプログラムである。アカデミックサービスの中の一つである学業のアドバイスでは、学内のボランティア学生から家庭教師を選び、数学、物理学、外国語、化学、生物学、経済学、哲学、心理学などの科目について、アスリートがフリーで利用できるというサービスである。

チームアドバイザープログラムでは、スポーツ・チームのメンバーに対し、教授陣からアドバイスやその他の精神的な支援を含めて受けられる機会を定期的に設けている。こうした教授陣からのアドバイスや支援は短期的な目標だけでなく長期的な目標を達成する上で有意義であると評価されている。

このような支援プログラムに加えて、アスリートが直面するアルコールやドラッグの問題に対してのガイドラインや相談の支援についてもダートマス大学は積極的に行っている。

次に紹介する南カリフォルニア大学(USC)のスポーツチームは、トロージャンというニックネームで、カリフォルニア州内だけでなく全国的に有名である。とりわけ、ロサンゼルス周辺の住民の多くは、UCLAのブルーインズとUSCのトロージャンのバスケットボールやフットボールの試合が行われる日には、最良チームのロゴの入ったトレーナを着て試合の応援に出かけるのを楽しみにしている。

USCにおいてもダートマス大学と同様にアスリートへの支援は充実している。学習アドバイスやチューターサービスに加えて、カウンセリングなどのサービスも提供されている。



<http://www.usc.edu/dept/athletics/saas/students/>

近年はアスリートに対して、アルコールや喫煙への注意やドラッグへの高い倫理性が求められるようになってきていることから、最新の基準に関する情報を提供することも重要となっている。USCでもアスリート用のハンドブックを作成し、全員に配布している。

http://www.usc.edu/dept/athletics/saas/private/documents/current_students/StudentAthlete_Handbook.pdf

今回はダートマス大学と南カリフォルニア大学におけるアスリートへの様々な支援の例を見てきたが、こうしたアスリートへの支援は、私立大学のみならず州立大学においても同様に制度化されている。そこには、スポーツ奨学金制度のほか、今回紹介したような、アスリートが大学での学習の支援を受ける時間がアカデミックサポートの一部として制度化されている。

NCAAにおいても、競技のルール基準を示すだけでなく、オフシーズンである学期にはチームとしての練習時間を最大限〇〇時間というように制限している場合もあり、コーチは大学の体育会の学内本部であるアスレティック・デパートメントに練習時間の記録を提出することが義務付けられている。こうした制限は、大学のアスリートがアスリートである前に学生であるということが前

提となっており、そのベースには、彼らや彼女たちへの教育機会や将来につながるような道を保障するという理念がある。

🖱️ 地域コミュニティの活性化にも貢献

一方で、カレッジ・スポーツが生み出す金銭上の利益は巨大でもあり大学にとっての宣伝効果も高いことから、アメリカのカレッジ・スポーツは商業化やプロ化という言葉で表されることも事実である。典型的な例は、フットボールやバスケットボールなどの強豪チームのヘッドコーチは高い報酬で全国からスカウトされるのが一般的であり、学長の報酬をはるかに上回る彼らの報酬がマスメディアで話題に上ったりもする。

優れたアスリートを全国から集めるためにも、大学側もアスリートたちへの環境サービスの充実をおろそかにはできない。具体的には、トレーニングルーム、ウエイトルームなどの施設に加え、コーチ、アスレティック・トレーナー、スポーツドクター、スポーツ栄養学の専門家、スポーツカウンセラーなどが各スポーツチームに専任として抱えられていたり、大学に専門家が常駐してアスリートが常時サービスを受けられるようになっているのが通常である。

アメリカのカレッジ・スポーツの商業化やプロ化はしばしばイギリスのアマチュアリズムと比較されて、批判されることも決して少なくはないが、地域コミュニティと大学という視点で見た場合、カレッジ・スポーツを通じての地域との交流が成功している国はアメリカ以外にはそれほど見当たらない。前にも述べたが、多くの人々がその地域コミュニティにある大学のフットボールやバスケットボールの試合の日には、チケットを購入して家族や職場の仲間と最良のチームの応援に出かける。そこには大学への帰属意識だけでなく、地域コミュニティの活性化という効果も伴っており、大学は決して象牙の塔ではなく、むしろ地域コミュニティにとっての大学というイメージで捉えられる。カレッジ・スポーツはスポーツを通じての地域の活性化という側面を伴っていることも忘れてはならない。